

Title	絡み合う人と人の中から生まれる柔らかいイノベーション
Author(s)	西川, 勝; 本間, 直樹; 八木, 絵香
Citation	Communication-Design 特別号. 1 P.236-P.245
Issue Date	2016-03-31
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/55669
DOI	
Rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/>

DIALOG 02

Masaru Nishikawa × Naoki Homma × Ekou Yagi

絡み合う人と人の中から生まれる 柔らかいイノベーション

西川 勝 × 本間 直樹 × 八木 絵香

PROFILE

西川 勝 | Masaru Nishikawa

臨床部門 特任教授

看護師として、精神科看護、血液透析看護、高齢者介護、認知症介護に従事してきた。臨床看護の哲学的展開を目指して臨床哲学を学ぶ。現在は『認知症ケア』に関わるコミュニケーションの研究・実践を進行中。

本間 直樹 | Naoki Homma

臨床部門 准教授

「臨床哲学」の創設メンバーとして、コミュニケーション論を軸に、哲学的対話の方法論と実践、「こどもの哲学」、身体・セクシュアリティ論などに取り組む。CSCDでは、ワークショップ記録を含めた映像コミュニケーションの実践的研究にも挑戦している。

八木 絵香 | Ekou Yagi

科学技術部門 准教授

早稲田大学大学院人間科学研究科修了後、民間シンクタンクにおいて災害心理学研究に従事。多数の事故・災害現場調査を行うと同時に、ヒューマンファクターの観点からの事故分析・対策立案に携わる。現在は、社会的にコンフリクトのある科学技術の問題について、意見や利害の異なる人同士が対話・協働する場の企画、運営、評価を主な研究テーマとしている。

釜ヶ崎のオッチャンとやる哲学

本間 先日「CSCD エリートって何なの？」という話を八木絵香さんとしていて、それは大学という限られた狭い土俵の上でのことではなく、もっと全然違うモデルのはずなのだけれど、われわれはそれをうまく表現する言葉を持っていないということが問題になりました。確たる専門性に依存しきらずにどんどん衣替えをしていって、かつ、さまざまな現場の人たちと「ここは大事」という部分をともに探り当てていく働き方自体は、領域や場所を問わないのではないかと思うのです。

西川 僕の場合は、やはり何をやっても臨床哲学がベースにあると思っています。

本間 哲学は大学ができるよりも古くからあるもので、昔は必ずしも研究ではありませんでしたね。これは結構大きなことだと思うのです。世界の歴史から見たら、大学が消えたら哲学することには全然問題がない。本音を言うと、大学の哲学は滅びたほうがいいと思っているくらいで、今は大学というすごく狭い領域に哲学が閉じ込められている。

西川 それを崩そうと僕も常に考えています。先にお話した（166頁）、僕が釜ヶ崎の藤谷さんとやろうとしていることも哲学だと本気で思っていますから。

本間 西川さんが本気でやろうと思っている哲学とは何ですか。

西川 どうしても考えたいことを一人ではなく、ともに考えること。藤谷さんを映像に撮る時も「僕は哲学は好きやけれど、一人ではできへんねん」「あなたとしかできないことがあるから考えてほしい」と言って口説きました。「あなたも僕の本を読んで〈一人のうらに〉のそのうらに〉を書きたくなったのなら、一人で勝手に書くだけではなく、僕ともしゃべってほしい」と。

釜ヶ崎の高齢単身者の生活保護受給者が社会的に引きこもりがちになるから、その社会的つながりとなる場を作って、さまざまな参加者とのコミュニケーションの仲立ちをする、というだけの役割ならば、別にそこに行って彼と哲学をする必要はないのです。哲学と言っても、別に立派なことを話しているわけではありません。「あっこちゃんの会」(注)でも「最近どこか行きましたか？」とか「成人式の日は何をしていましたか？」みたいな話をしているだけです。普通、大学教員がそういう場にいるということは、何かを調査しに来るか何か立派な話をしに来るかなのですが、僕がしていることはただじっくり座って落ち着いてしゃべることだけ。

テレビ局が取材に来た時には、「いわゆる大学教員の役割から外れて普通の雑談をしていられる場所としてひと花センター(a)があります」としゃべりました。向こうは「釜ヶ崎のオッチャンたちにこういう居場所ができたことが大事なのだ」と言わせたかったのですが、僕がそう言わないものだから困り果てて結局放映されませんでした。世間の人たちが分かりやすいストーリーとして描いているものに乗っかれば、分かりやすいことしかできないわけです。「大学教員として釜ヶ崎に来て、こういう形で釜ヶ崎を変えようとしているのですね」と言われるけれど、「いえ、ここに私の居場所ができたのですよ。それを迎え入れてくれたあの人たちは一体何を考えているのでしょうか」とい

うのが僕の本音です。まともに小学校も行っていない、お金だって苦労している、社会からいらぬもののように言われている人たちにとって、大学教員なんて「憎（にく）ましい」以外の何者でもないと思うのです。それこそ幼い頃から施設に入れられていた人、働いてもうまくいわずに刑務所に入ったり出たりを繰り返した人、頑張っていたけれど何かをきっかけに職を失った人、人に裏切られた人、人の世話になりたくないホームレス生活をしていただけで、ようやく生活保護を受けることを受け入れたとたん病気になった人……。そんな人たちの中に何の苦労もなさそうな人間が入って来て「皆さん、話しましょう」と言ったって「何言ってるねん」と思うでしょう。

「ひと花センター」にしても「釜ヶ崎芸術大学」(b)にしても、そういう今まで付き合ったことがないような人たちが来るわけです。そんな彼らがどのようにして自分の固まった心をほどこいていっているのか。どうしてそういう人たちと付き合えるようになったのかということがすごく不思議です。こちらは、ある程度覚悟を決めて行っていると言ってもいつでも逃げられるじゃないですか。「やめた」と言ったら終わりです。でも彼らは常にそこにいるのですから、来る人間とどう付き合うか、それほどきっちりしたものはないかもしれませんが、やはりものすごくいろいろなことを考えて折り合いを付けながらやっていると思うのです。そこを聞きたいのです。

今「哲学の会」のメンバーの中から「楽描きの会」という自分たちで絵を描くグループができ上がって、結構活発に動き始めています。ああいうのを見るとすごいなと思います。僕が『星の王子様』を読んでいると言ったら、「今度『楽描きの会』はモデルさんに『星の王子様』を朗読してもらって、それをデッサンする会にしました」という感じで行われていて、「その前後に『哲学の会』をしましょうよ」と、もう一方的な受け手ではなくなってきているのです。

本間 それはどのくらいの期間でそうなったのですか？

西川 「あっこちゃんの会」でもう1年ですから「哲学の会」はもう少し前からですね。毎月やっています。

本間 では、もう2年くらい前から毎月やってらっしゃると。

西川 「楽描きの会」は今年の春から始まっています。最近、法善寺横丁などにスケッチ会に行くと3時間くらいねばってスケッチをしていたら怒られたとか、お寺の住職さんに話をつけてご本尊を拝ませてもらったとか、リーダーも結構積極的なのです。いらなくなった石膏像をもらってきてデッサンをしたり、一生懸命やっているのも面白いですね。

現場での立ち位置をめぐる

本間 これは八木さんにも聞いてみたいのですが、日本の研究者には最近、保護されたアカデミズムの内部でどう競争していくかということに飽き足らず、何らかの現場に関わろうとする志を持った人たちがいます。その場合、現場に貢献することをどこまで本気で考えているのかを知りたいのです。たとえば人類学者は現地の活動に何を還元しているのだろうか。最近知り合ったある研究者が、調査に行く外国人研究者について地域の人たちの表面だけを見て、あるいは図書館に眠っているヨーロッパ系の人が書いた資料を漁ってくるだけで誰にも聞き取りはしないし、現地の人は何を考えているのかということを知ろうともしない、つまり研究自体が非常に植民地的であることに腹を立てておられました。そこから先は西川さんの話とそっくりなのです。その方ご自身の場合は音楽が武器で、ギターと一緒に歌を歌い、詩と一緒に作ることを原点として研究をやり直そうとしているのですけれど、そういうスタイルはアカデミズムではなかなか受け入れられない。

西川 やはり学問的な方法や目的をある程度きっちり決めてやることを基本にしないと、行ってみたらこんなに面白いことがあったというだけでは、ただのエピソードになってしまいますね。

本間 学問批判をしたいわけではなく、当事者にとって自分はどんなふうに見えて、どう役に立つのだろうかという視点で関わっている研究者がどれくらいいるのかを知りたいのです。

八木 私の場合はあまり研究者でありたいタイプではないので、基本的なスタンスはとてもシンプルです。目の前に解決したい問題がいくつかあって、それをどうにかしたいからその現場に入って行く。でも現場に居すぎてしまうとダメだということに気づいて行き来することになります。

本間 現場で抱えている問題を何とかしたいけれど、そのままではやはり解決は見えないと思うわけでしょう。

八木 個別の現場に入りすぎると、私の場合は対象が政策と結びついているので、視点が狭すぎて自己満足になってしまうのです。そこで一生懸命被害者の支援をしている、頑張っている人のような位置づけになってしまう。それを政策に転換させようと思うと、ある程度抽象度を上げた理論にしないといけないし、政策に届く言葉にしないといけない。その前提に立った時に、私のいる科学技術の分野では、そういう研究者もいないと困るということが分野全体の中の理解としてあります。

本間 「そういう研究者」というのは？

八木 現場に割とグランディングしている人です。アカデミズムの中で上を目指している人たちもいる一方で、「それだけではダメだよ」という大きな流れがあるので、現場にグランディングしていることが武器でもある。単純に言うとな原子力などがそうで、そういう研究者がいないと分野全体が成り立たないと思っているから、研究のやり方にも多様性が内包されているのです。

本間 お二人の話は遠いところでつながっていて、CSCD ならではの話だと思います。八木さんの場合はテーマが科学技術ですから、問題の規模やシチュエーションの面でも一人でやる研究領域ではないので、総合的に見て現場に関わることが求められている。片や西川さんはアカデミックな研究の中では多分まだ正確な位置を持たないのだけれど、現場の人や現場の理解に努めるある種の熱心な研究者から、とても重要な活動だと位置づけられていると思うのです。だからこそ CSCD の活動として意義があるのだと思います。そういう意味で西川さんと八木さんは、ある種タイプが似ていると思いました。

八木 違うことをやっているけれども、カテゴライズすると似ているということですか。

本間 八木さんはポジショニングを明確にするほうが動きやすいし全体のためになるのだけれど、西川さんは逆のパターンではないでしょうか。下手をすると単に現場の人のように思われてしまう。この役割をどう呼ぶのが CSCD としての課題でもあると思います。

八木 西川さんは多分 CSCD の中でも一番のフロンティアで、どちらかという事を起こしていくほうにウェイトを置いておられるように見えますが、そういう人もいいと思います。でも、それを CSCD の成果として言葉に変える機能が必要で、現場を理解し、かつアカデミックな文言にできる人と一緒に全体として発信していく構造ができたらいと思います。大学の中だけにいる人では絶対考えつかないような現場を作っている人がいることが CSCD の一番の売りです。しかしそれをシステムティックに考えて、たとえば教員 20 人のうちの何パーセントくらいがそうであればいいのかとか、フロンティアの活動をいかにうまく別の教員の活動と結びつけるかといったことが、うちのセンターは弱いのではないのでしょうか。成果をうまく表現できていないなと思うことがすごくあります。

「ストーリー」を語ることの危うさ

本間 もうひとつ、西川さんの話を聞いていて、現場は結構ストーリーというものに弱いと思うのです。だからアカデミズムから外れてしまった時、その場限りの強い言葉や魅力的に見える理念、ストーリーにすごく弱い。実際、ストーリーを求めて皆さまさまざまな講演会に参加されるわけですが、それは実は現場を動かすものではなく、どちらかというエンターテインメントなのです。ストーリーはあってもいいし、たまには頼りにしてもいいけれど、「それにのっかってしまったら危ない」ということを言えるのも、やはり学者なのではないかと私は思うのですが、どうですか。

西川 認知症介護研究会で天田城介さん(中央大学)と僕がしゃべると、僕がストーリーテラー、彼がアカデミシャンになって「西川さんのストーリーは……」と社会的に引いたところからバシッとと言われることがあります。

本間 西川さんの話はストーリーなのでしょう。

西川 どちらかと言えばそうなのではないですか。目に浮かぶような話をしますから。

本間 私の言っているストーリーの意味は少し違って、たとえば先のインタビュー（164頁）でお話に出た細川鉄平さんが「介護の世界というものは『管理型』か『受容型』かという2つの理念に引き裂かれていて、引き裂かれているがゆえにやる気のある人は辞めていく」と言うのです。具体的に言いますと「ウンコが垂れっぱなしでもいいじゃないか」と認めようという人と、「管理が大事なのです」という人の2種類あって、それは両方ともストーリーです。ですから現場の人を勇気づけるような指針のようなものがあるかのように言われるのだけれど、細川さんなどはまさにその間にいる。でもそこには明確なストーリーはないのです。

その時に学者がどこに立つのかということに私は関心があって、下手な学者は現場から上がってくるものをストーリー化して、どちらかを強調して終わることが多いのではないかと思うのです。それでは何か求められているストーリーを消費するような感じがして、引き裂かれて辞めていくような現場の人たちに本当に役に立っているのか、すごく疑問に思うのです。

西川 僕は明後日、大阪市の「EPO（特定非営利活動法人エンパワメント・プランニング協会）」という知的障害や発達障害の人たちの事業所で話をします。それはこの前、東大阪市の「パンジー」という施設で、パニックになった発達障害の子をスタッフが押さえたところ、心停止になって救急車で搬送したけれど亡くなってしまったということがあり、「パンジー」にかかわっていた当事者、今起訴されている人たちを集めて2日間行われた勉強会に呼ばれて発言したのがきっかけです。初めて呼ばれたのですが、そこで「ケアの暴力性」をテーマに、ケアの中で起きた出来事についてかつて精神科で働いた人間としてどう思うのかについて発表しました。その中で「ためらいの看護」とも言える、自分の足場を崩していくようなことを常にやり続けないと、ケアする人間は圧倒的に暴力的になっていくという話をしたのです。「ものすごく新鮮な話でしたが、あれだけでは落ち着きどころがない。もう1回話をしに来てほしい」と言われて行くのです。

そこは、それこそ「管理」か「受容」かの世界です。人権を守るのだったら、放っておくしかない。でも放っておいたら、わざとバンバン頭をぶつけて頭蓋骨が折れるくらいの自傷行為をするのですから、その時は押さえざるを得ない。ところが事故が起きたら「ひどいことをしている」となってしまう。社会から要請されることも自分たちがしたいと思うことも、常に引き裂かれている。そんな現場の中でどう考えていくのか。あまりに強すぎるストーリーの中で皆、苦しんでいるわけです。それに縛られている自分というものを見つめ直さないと、相手を縛ることもなる。

それに対して、僕は「できないことのお互いさま」というように考えたらどうでしょうと提案しました。いいケアがしたいけれどできない。相手もケアをしっかり受け止めたいと思うけれどできない。自立しようと思っててもできない。自分をコントロールしようと思っててもできない。お互いできないところで「かなわんな」と思いながら「できなさ」を共有する。「あるところまでいったら笑うしかないようなできなさってあるじゃないですか」と。これは鷺田清一先生も言っていたのですが、「明るいニヒリズム」です。「そんなバカな話はない」と考えるのではなく、「そういう形での希望しか残され

ていない現場かもしれないけれど」と考える。ギブ・アンド・テイクの考え方、つまりいいケアをしたら必ず相手はよくなると考えたら絶望的になるような現場だと思うのです。ケアする者もされる者も自分のよりどころを常にしっかりと持てない現状をまず認識したうえで、そこでやっていくことはストーリーではなく一つ一つの具体的な実践として、その場から逃げないというか、しぶとくというか、しなやかにというか、そこに居続けることがケアで一番大切なことだと思います。僕は「食うためにやっています」という人が一番信用できるのです。

本間 信用できるとは？

西川 「お年寄りが好きだから」とか「人のために」という理由では、ケアの現場は務まらないといつも思います。「お金がないから、食うためにやっています」と言う人は逃げない。逃げなければ、相手に対して「あんた、この人生を無駄にしたらアカンで」とか「小銭稼ぐのに弱い者いじめするような人生を選んだらアカンで」と真剣になる。「食うためにやっている」という人は、自分の仕事にどこか誇りを持たないとやっていけないわけですから、一番信用できるのです。ストーリーを語る人は、言いたいことを言って消えるような感じで、自分のストーリーが通用しなくなると速攻で辞めてしまうから一番信用できないし、現場をくちゃくちゃにするのです。「お前らに俺ら患者の気持ちがかかるか？」と透析の患者さんに言われても「ガチャガチャ言わずに手を出しなさい！」と、針を刺してしまうような看護師さんも居てもらわないと困るわけです。その人だって、いつも厳しいわけではなく優しい時もある。頭でっかちではなく、その場その場のことを大事にする人が必要なのです。

絡み合う中で新しいことが始まる

八木 私が嫌で嫌でしょうがないのが「みんなが常に一丸となっていないとダメだ」というメンタリティです。物事の取り組みにおいて常に一丸となっている必要はなくて、ぼんやりとでも目的意識が共有できていたら、今のお話のような文句を言われながらもさっさと透析の針を刺していく看護師さんのような人がいて、それで物事は進んでいくじゃないですか。

本間 どういう時に「一丸になれ」と言われるのですか。

八木 たとえば「地球温暖化問題」をテーマに政府の参加型会議をやっている時に、自分の意見と違うことがあるといちいち「この情報の精度はどうだ」と言ってくる人がいます。でもそこにはいろいろな考え方があるし、いろいろな形で進んでもよいのではないのでしょうか。常に一丸となっている現場は怖いというか、もともとないものを無理に作っているとしか見えないのです。

本間 対話とはそういうことですか。

八木 一丸となるためには、誰かの欲望を具現化して他の人を黙らせるほかないと思うのです。

本問 私も常々自分に問いかけているのですが、社会にコミットする時に、ある既存のストーリーやカウンターストーリー——両方とも運動であったり権力であったりするのですが——の「どちらにコミットする？」という聞かれ方をすることがあります。その時に「そうじゃない」と言えることが研究者であろうがなかろうが必要だと思うのです。たとえば私は運動家というものは嫌いなのです。「これがいい」となったら目の前の現実を無視して押し通すから「何を考えているのか？」と思うのです。もっと現実是多様じゃないですか、一人一人違いますし。

八木 「自分のストーリーに沿わない現実には存在しない」という感じで物事を進めようとするということですよ。

本問 そういうところに、二者択一とか既存のストーリーや権力にコミットするのは違う、研究的な、あるいは大学人としてのコミットの仕方があって、CSCDのようなところが結構大事な役割を果たせるのではないかと思うのです。

西川 釜ヶ崎で「哲学の会」をやった時に「兄ちゃんら、キリストか?」「違うんやったら、あっちか?」と言われたことがありました。要するにキリスト教系の活動家か、労働運動系かと聞かれたんですね。「いや、大学から来ました」と答えると「は?」「何だ、お前ら?」という感じで、どちらでもないことに驚かれました。

本問 社会の中に位置づけを持たないということの積極的な意味はやはりあるのだと思います。

八木 私も現場で「何で来てるの?」とよく聞かれます。「研究です」と言うと、皆分からないけれども「研究のためなんだ」ということで一応落ち着く。特に私が入っているフィールドは「電力会社から金を貰ってるのか」「左翼運動か」とよく聞かれるので、「研究で」というと「推進の研究か? 反対の研究か?」と、それは本当にしつこく聞かれます。すごく面白かったのは、宮城のフィールドに半年くらい通って大分仲良くなったかなと思った時に、私の指導教官が定年まで2年くらいだったので「ねえ八木さん、〇〇先生ってもしかして退官の後この辺で出る気?」と言われたことでした。何に出るのかというと選挙です。私たちが何のためにやっているのか分からないなりに彼らが思い当たった理由が、どうも選挙の地盤固めだったみたいで面白かったですね。

本問 CSCDの社会学連携の活動に批判的な大学教員の言い分も分かる気がします。つまり研究というのは社会と一定距離を置かないといけない。これは人文系・社会系を問わず結構皆が思っていることで、それは一理あると思います。しかし、じゃあどういう在り方がいいのか、といった時に旧来の距離を取るやり方が学問の自立性なのか、というのが私が持っている疑問なのです。

八木 最後にお伺いしたいことは、コミュニケーションデザイン・センターで西川さんは何と何をつないでいるのでしょうか。あるいは何と何をつなごうとしているのか、どんな回路を作ろうとされているのか。たとえば私の場合、現場と政策をつなごうとしています。西川さんの場合は、どこに向かって何を発信されているのでしょうか。

西川 僕自身のイメージとしては納豆みたいな感じでしょうか(笑)。納豆は触れるとネバーストと糸を引いて互いに絡まり合うでしょう。あらかじめこれとこれとの仲介者になるというような気持ちはなくて、いろいろな人たちとの関わりがあって、別のところへ行くと

そこでまた何か糸を引くようにつながって、いつの間にか知り合っている、そんな感じですよ。たとえばこれまでの話に出た細川鉄平さんや砂連尾理さんなどもそうで、絡み合う中で何か新しいことが始まることもたくさんあります。

八木 基本は人と人をつないでいるのですね。

本間 人と人とをつなぐ。それは非常にシンプルな定義ですね。それは役割や役職ではない、その人そのものとのつながりです。ですから鉄平さんだとか砂連尾さんだとか固有名が出てくるのですね。

そんな西川さんの活動を、あえて最近の言葉で表現すると、「柔らかなイノベーション」という感じがします。イノベーションの基本は人と人がつながることで、それがないとその先は絶対ありえないわけです。知識と知識が融合することはありますけれども、それは人が媒介しないと融合しないから、知識の生産にはおそらく確実に西川さんが何らかの形で関与しているのです。イノベーションというものは、それこそ絵に描いたようなものではなく、限りなく可能性を生んでいくということに近くて、その可能性を生んでいく形態がすごく大事だと思うのです。つまり予見できないものの可能性を西川さんはすごく大切にされている。生き方としてもそうですし、役割としてもそうですね。そういう意味でもイノベーションという言葉は西川さんの活動にぴったりだと思います。それを他の大学人にも分かるように、もう少し分かりやすく表現できたらいいのですね。ありがとうございました。

(2014年6月26日 CSCD にて)

注釈

注) 「あっこちゃんの会」については 167 頁の注釈を参照。

リンク先

*a) ひと花センター : <http://www.hitohanap.org>

*b) 釜ヶ崎芸術大学 : <https://ja.wikipedia.org/wiki/釜ヶ崎芸術大学>

